

へ帰った時のため、ある交換車で商人から日本紙幣を集めている者もいた。満州紙幣は満州でしか通用せず、朝鮮紙幣は満州・朝鮮でしか通用しなかったからだ。またある者は臂広など手に入れていた。付近の社宅に入りびたりの者もいた。

女に頼られて振り切れず、同様にいく者もあった。武器はなくてもその人数だけで、少なくとも商人や朝鮮人に対しては頼りになりそうなの日本の軍隊も、いつまで安東にいてくれるものでもあるまい。現に日本軍が統々と奉天（現在の瀋陽）へ送られているという噂が飛んでいる。この町にも道からソ連軍がどつと入って来るであろう。若い女の動揺は察するに余りがあった。特に家族と離れて單身遊蕩して来ている女は哀れだった。どうせソ連兵にひどい目に合わされるならという気持ちで、残像のようにまだ少しは頼りになりそうに見える軍人にすがりつかせるのだろうか。無軌道で有名な挺身大隊の某准尉は小学校の女教員の家へ移って行った。東洋婦糸で私と警備を交替した見習士官は会社の女医といっしょになっていた。逃亡者も次第にふえていた。私のところへ相談に来る者もふえてきたが、自習のある返答などできるはずもなかった。

ある日、第三中隊の川西見習士官に誘われ、社宅から借りてきた臂広を着込み、これも借り物の束帯を着かむって、二人で安東の町を歩いてみた。案外平穏だった。駅前には逃亡者がおおぜいいた。軍服のままの者は銃闘帽の風堂とひさしを取っていた。それが軍服を捨てた印らしかった。久しく見られなかった汗粉屋やまんじゅう屋も出ていた。もちろん日本人が日本人を相手にしているのだ。この人たちはこの先どうなっていくのだろうか。

またある日第三中隊の戸田准尉の誘いで、行李班から馬を借りて、四ヶ所ばかり南西の遼東子温泉へ行ってみた。温泉といっても沸かし湯だった。かつて安東一の名湯と誇られた「おとみさん」の経営する旅館があって、温泉プールもあるという噂を聞いていた。プールはともかく、せめて風呂に入れたらという希望はあった。着いてみると、さすがに敗戦後はもう営業していないということだったが、女将おとみさんが、「せっかく遠い所を来ていただいたのだから」と請じ入れて、紅茶を出してくれた。ソブトン紅茶に角砂糖とジョニーウオーカーのウイスキーまで添えられていて、今ごろこんなものがあったのかと驚いた。

(後略) このおとみさんが、花柳界の女性たちを説き伏せ、ソ連軍将兵の慰安に出たるところを承知させ、しかしそのおとみさん自身は、そういう女性たちを使って、ソ連軍の動向をスパイしていたという罪で銃殺された。これより先、本巻が下って来た若い日本人女性たちが困っているのを、親身に世話したのおとみさんだった。その後引き連れて来た慰問たちによって、おとみさんの生地の井原の青時に慰問隊が建てられたと聞いている。

九月上旬、安東へ来ているソ連将校に、何かの形で歓迎の宴を張しようという話が、某団司令部で持ち上がったらしい。これが部隊対抗の「もう大会」になった。しかし熱狂しているのは日本人だけで、特別席に座った当のお客様はさっぱり興味がないらなかった。接待役の某團兵器部長山本少佐の勧めでウイスキーを飲みながら、通訳として来ている女に戯れかかっていた。衆人環視の中で戯れるものがあったが、女のほうも慣れたものだった。喧嘩あたりで自派諸人を相手にしているくろ

うとだろりと世が想像していた。

続いて野球大会が計画され、付近の会社から用具を借り集めて練習が始まった。この試合が始まらないうちに、私たちは安東を去るこになったが、すもも大会も野球大会も、何もすることがないだけに、なおさら不安に悩まされていた部隊の沈滞した空気を、久し振りに活気づける役には立った。特にすもも大会で、本職の力士がいて個人優勝者となり、団体でも二位になった私たちの大隊では、真品の四斗樽の鏡を抜いて、夜遅くまであちこちの幕舎から苦笑のよい殺声が続いた。

もちろんこれも一時気を紛らしたにすぎなかった。ソ連側の命令で、いよいよ奉天へ送られると決まると、逃亡者は激増した。私が第三中隊で初年兵教育をしていたとき助教を務めていた下士官数名が私を呼びに来た。すでに民間人と通話していつでも兵隊に着替えられるように手配してあり、私の分もすぐ調う、いっしょに逃げましょうというのだった。私は全く行動の自由を、いや考える自由さえ奪われた人間のように、一瞬何の答もできなかった。ただ、あの安東中学学生会の舎監の爺さんの言葉のせいかもしれないが、日本人に頼ることがどうにも不安でならなかった。結局は剛だが、帰国までの生活のことを考えれば、極めて危険な賭だというより仕方なかった。私の臆病のせいだろうか。もし決行していたらどうなっていたか、だれにもわかることではあるまい。

私とて逃げることを全く考えなかったわけではない。しかしなぜか軍服を脱ぐことは一度も考えなかった。私はもともと自動車輸送の出身であり、私の当番兵吉本は大阪で自動車の運転手をしていて男だった。軍のトラックを一台盗み、気のきいた部下数名を乗せ、私と吉本が交替で運転して南鮮ま

で下るという案を何度か考えた。朝鮮は三十八度線を境に米・ソ両軍が占領することはわかっていた。そして米国には日本から戦争をしかけて多大の損害を与えたのに対し、ソ連は不可侵条約を破って向こうから戦いをしかけてきたのであって、こちらからは何の損害も与えていないにもかかわらず、米軍の占領下に入ったほうが安全だという、かなりはつきりした手感を持っていたのはなぜだろうか。そしてその手惑の通りだったが、しかしこの計画も時すでに遅いように思われた。もし決行していたら、三十八度線にたどり着く前に殺されていたか、捕えられてやはりソ連の収容所へ送られていたか、それとも首尾よく南鮮にたどり着き、従ってこれから先はもう書くこともあまりないほど早く帰国していたか、これまただれにもわかることではあるまい。

(後記) 私の大隊で南鮮への逃遁行を首尾よくやっていたのは、帰国後すいぶんたってから知った。前記の本職の力士で、彼はまず韓羅江を渡り、新義州から小舟で岸づたいに三十八度線の南までたどり着いたのだった。時すでに遅かったのか、岸から銃火を浴びせられ、もうだめだと、何故も寛宥したということだった。これが後の皇親王の崩御であり、原片男監禁である。

出発の前夜に最も多くの逃亡者が出たのは当然のことであろう。第三中隊長代理川西見衛士官が、今夜逃げるからと、別れの挨拶に来た。満州に親戚のいる彼がよくこれまで辛抱していたと言うべきかもしれない。下士官以下に比べ将校が多すぎるからということ、安東に残ってあとから追及することになっていた私は、急に第三中隊長代理を命ぜられ、元の言葉に戻った。そしてたとえ何人の逃亡者が出ようと、一人でも残っているかぎりには仕方がない、最後までついて行こうと腹を決め、